

天聖宮と二つの蒙哥聖旨裏碑

～山西省浮山県東張郷の天聖宮遺址を訪ねて～

渡邊 久

はじめに

山西省臨汾市の東郊、浮山県東張郷貫里村に天聖宮あるいは慶唐観と呼ばれる道観の遺址がある。2005年初秋、「13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究 元朝史料学の構築のために」(代表：奈良大学教授・森田憲司)、および2009年夏、「中国社会へのモンゴル帝国による重層的支配の研究 元朝史料学の展開をめざして」(代表：龍谷大学教授・村岡倫)による海外調査の一環として、いずれも村岡氏に同行させていただき、ここを訪れる機会をいただいた。これはその報告の一部である。

[1] 慶唐観から天聖宮へ

臨汾は、かつては平陽とも呼ばれ、古くは漢の票騎将軍霍去病が匈奴征伐に北上するに際して、実父と対面した故事も知られている。また、五胡十六国時代を拓く、匈奴の劉淵がそこに根拠地をおいたように、長安から太原へ、さらに北方草原地帯へと至る、太古以来の交通・軍事の要衝である。また平陽の北にはその神霊を祭る霍山がそびえ、市内の堯廟をはじめ、周辺地域には民間信仰に由来する史跡や施設が多数存在する。

臨汾市の東方に位置する浮山県へは、山西独特の黄土台地に耕地がひろがり、羊の群れがときどき道路わきに見え隠れする、のどかな風景の中を行く、一時間ほどの道のりである。浮山県には、現在も前漢の大宰相であった霍光の墓といわれる古跡が残されている。この県は北緯36度線上にあり、日本では茨城県の水戸市周辺にあたる。

浮山県の南部に位置する東張郷は、二峰山(標高1267m)を境として翼城県と隣接する。東張から翼城へは、二峰山を越えてゆく山道とその山麓を迂回する道のふたつのルートがある。その岐路に貫里村への入り口もある。この道をとって二峰山の西北麓に広がるテーブル状の黄土台地の上へとつづく坂道をのぼりつめると、貫里村聚落に至る。天聖宮の遺址はここにある。

天聖宮は、唐代に龍角山慶唐観としてはじめた。その名の由来となった二峰山はかつて龍角山ともよばれていた。一説に、龍角とは角笛をさし、道教の儀式に用いることもあったという。唐の龍角山慶唐観については『道藏』洞神部記傳類の『龍角山記』がよく知られているし、清代の『浮山縣志』にも詳しい記事がある。

かつて唐の高祖の武徳年間(618～626)、ここにあった大樹の下に、白馬と青童を従えた老子さまが出現し、「わたしは唐の皇帝の遠祖である」とのお告げを下す。里

人から政府に報告したところ、唐では建国の当初にあたって老子を皇室の祖先とした事情も手伝って、使者が派遣され、ついに勅命によりここに老子をまつる祠堂を建てることになる。慶唐観の創建説話である。

実際には、唐朝の最盛期玄宗の開元十四年(726)頃に皇帝直筆の額と碑文を下賜され、正式に道観へと昇格する。記録に残る慶唐観のはじまりである。このとき旧名の羊角山から龍角山に、浮山県も神山県に改称された。そもそも機会あるごとに唐朝は全国に道観を増設したが、この時の修築責任者は玄宗の後宮に勢力を持つ宦官・高力士であったとされ、ここ慶唐観には老君殿、三清殿が営まれた。その規模は、当時、壮麗さを誇ったといわれる、亳州の明道宮、洛陽の上清宮に並び称されたという。とはいえ、現在は見る影もない。ただここに残る、天宝二年(743)の「皇帝宮金籙齋頌并序」の碑石断片が唐代の香りをかすかに伝えているにすぎない。

戦乱にあけくれた五代後唐の長興年間(930~933)にも、慶唐観は一時的に修築されたようであるが、宋により天下が統一されると、慶唐観もようやく本格的に重修される。太宗皇帝の淳化元年(990)のことである。その際に「宋慶唐観重修功德碑」が建てられた。これは「晋州神山県龍角山慶唐観重修功德碑」として『三晋石刻総目』にも題名がみえるが、実物は浮山県博物館に収蔵されているとのことである。

さらに道教を厚く信仰したことでも知られる北宋の第三代皇帝真宗の手によって、景德二年(1005)には、三門、道院、行廊大小三百余間が勅建される。また『宋史』巻六五、礼志十五には次のような記述もある。

大中祥符八年(1015)、晋州慶唐観、古柏中に別に槐を生ず、長さ丈餘。

のちに「天聖古柏」と称されるようになる巨木があり、千年あまり後の民国時代の写真にも、その姿が残されているが、現在は見当たらない。

第四代仁宗の天聖五年(1027)四月に、ついに観から宮に昇格する。いわゆる天聖宮のはじまりである。それ以降は天聖宮あるいは天聖観とも呼ばれてゆく。その折に孫景文なるものにより碑文が撰せられたとされているが、それについては二通り存在したことになる。ひとつは「天聖宮紀事碑」天聖七年(1029)であり、『三晋石刻総目』に題名が掲載されている。もう一つは熙寧四年(1071)に立石された「天聖宮事蹟碑」(『[雍正十二]山西通志』巻五七、古蹟一、浮山県所収)である。

金の章宗の明昌三年(1192)には、平陽府浮山県の天聖観において紀聖碑亭を重修する。あわせて唐代の碑を納める蓋碑亭も修築された。この時「重修紀聖亭碑」が立石されたといわれている。金代にはこのほかにも烟霞閣が大定十七年(1177)に天聖宮の伽藍内に建てられている。はるかのちの明代に「烟霞閣に登る」と題する詩が詠まれるので、少なくともその頃までは閣が継承されていたと考えてよいだろう。

天聖宮遺址にある小祠の東西に配置されている一群の碑石から、元代の様子もうかがうことができる。たとえば、元の至治三年(1323)の「天聖祈雨靈応記碑」と読める碑石が境内に現存する。また西側には、元の大徳七年(1303)のものとして「石雕琉璃角柱」なる大きな石柱二本がならべられている。

また参道沿い西向きに立つ一組の碑石もある。一応は篆額、碑、亀趺を備えているが、相互にサイズが食い違うことは一見して明らかである。その篆額には「天聖宮紀事碑」とあるから、上述した天聖七年(1029)の碑の題名と一致するようである。篆額よりかなり小ぶりの碑本体に刻まれた文は、すでに摩滅していて肉眼ではほとんど読み取れないが、冒頭はかすかに「重修天聖宮」の文字が判読できる。近年、この遺跡について記した『龍角山与慶唐観』によれば、これは清の康熙年間のものであるとされている。

天聖宮は、唐から清までの歴代王朝によって、たびたび修築や保護が与えられ、時には文人たちに詩作の題材を提供するほどの規模を誇ったようである。しかし現在そこには、古の秀麗さをうかがわせるような建物はほぼなくなっており、近年ささやかな房舎が再建されたほかは、遺址とよばれるにふさわしく、慎ましい小さな祠堂がのこされているにすぎない。だが、その祠は悠久の歴史を一身に背負い毅然とした高潔な英姿でそこに佇んでいるように見える。周囲には、一面に緑一色のトウモロコシ畑がひろがり、参道わきには、よく手入れされたコスモス、ダリアなどの清楚な花が慎ましやかに咲き、訪れるものを温かく迎えているかのようである。

[2] 天聖宮遺址(現浮山県慶唐観)存碑目録

下の表は、天聖宮に現存する碑(天聖)、貫里村の老年小学センター碑廊内に現存するもの、および『三晋石刻総目』臨汾卷、『龍角山与慶唐観』(龍角山)、『慶唐観』などにおさめられている情報や録文の有無について整理したものである。

《唐》

	撰者			三晋	龍角	慶唐	貫里	天聖	備考
唐太宗令道士女冠在僧尼之前詔		貞観 11	637		録文	録文			
唐高宗上老君太上玄元皇帝詔		乾封 1	666		録文	録文			
唐玄宗太上老君道德経幢二序		開元 16	728	○	録文	録文写真			
大唐龍角山慶唐観紀聖銘	李隆基	開元 17	729	○	録文	録文写真			金石文字記
唐明皇詔下慶唐観		開元 21	733		録文	録文			
唐明皇再詔下太上老君観		開元 27	739		録文	録文			
唐玄宗大唐平陽郡龍角山慶唐観大聖祖玄元皇帝宮金籙齋頌并序	崔明允	天宝 2	743	○	録文	録文写真		残片	金石萃編 16-16
同碑陰(李寰批題)		大曆 14	779	○					
龍角山紀聖銘碑李寰外題		長慶 3	823	○					

実見した《大唐平陽郡龍角山慶唐観大聖祖玄元皇帝宮金籙齋頌并序》天宝二年

(743)については、「慶唐觀金籙齋頌」（『金石萃編』二編、唐四六、所収）および、『三晋石刻総目』臨汾卷 165 頁〔198〕に記事がある。実測した大きさは 70×24×24 cm であった。

《宋》

	撰者			三晋	龍角	慶唐	貫里	天聖	備
晋州神山縣龍角山慶唐觀重修功德碑	王千里	淳化 1	990	○	録文				
慶唐觀碑銘并序	韓望	大中祥符 1	1008		録文	録文			
宋真宗太上老君混元上德皇帝册文		大中祥符 7	1014		録文				佚
中書門下牒碑		天聖 4	1026	○				存	
天聖宮紀事碑	孫景文	天聖 7	1029	○	録文			篆額	
重修三清殿記		政和 1	1111		録文				

《天聖宮紀事碑》は篆額のみである。この篆額は、『三晋石刻総目』臨汾卷 166 頁〔208〕に該当すると思われるが、その下に組み合わされている碑板は、前述したように篆額と一致しないようである。

《中書門下省牒》

『三晋石刻総目』臨汾卷 166 頁〔207〕に、「青石質、長方形。碑版 100×55×10cm。宋天聖四年(1026)三月」とあるのが、それにあたるようである。その冒頭は「尚書省牒」とはじまる。祠堂の基壇上に置かれている。

《金》

	撰者			三晋	龍角山	慶唐觀	貫里村	天聖宮
重修嘉潤侯殿記	王建中	天会 11	1133	○	録文			
重修華池嘉潤侯殿記	田蔚	癸丑	1167	○	録文			
重修天聖宮紀聖銘碑亭記		明昌 3	1192	○	録文			

《元》

	撰者			三晋	龍角山	慶唐觀	貫里村	天聖宮
蒙哥皇帝聖旨裏碑(三月)		戊午	1258	○	録文	録文写		
蒙哥皇帝聖旨裏碑(四月)		戊午	1258				存	
華池廟之贊碑		至元 27	1290	○				
天聖宮祈雨靈応記碑		至治 3	1323	○		額写真		存
天聖宮紀事并序	王利用	至元 5	1339		録文	録文		
天聖宮紀事并序	趙承禧	至正 2	1342	○	録文	録文		
謁天聖宮并序碑	僕玉立	至正 6	1346	○	録文	録文		
宿天聖宮并序碑		至正 10	1350	○				
石雕琉璃角柱(左右)		大德 7	1303	○				存

《二つの諭蒙哥皇帝聖旨裏碑》

『三晋石刻総目』には「伝諭蒙哥皇帝聖旨裏碑」の存在が記されている。それについて、住持の荘道士によれば、その碑は天聖宮遺址には現存しておらず、同村内のある個人住居で管理されているとのことなので、2005年にはそこを訪れた。天聖宮から自動車ですばらく移動した、黄上台地の崖を利用して作られた一軒のヤオトンである。

碑版は縦78×横51×厚17cmで、青黒色石質、円首、楷書、印章が刻されている。その右上冒頭は「蒙古皇帝聖旨□□大王令旨裏」とはじまり、「戊午年四月十三日」で終わっている。

これについては、調査の主宰である村岡倫氏が「モンゴル時代の山西平陽地区と諸王の権益 一聖姑廟「阿識罕大王令旨碑」より一」（13、14世紀東アジア史料通信第10号、2009年3月）において考察された。

その後、高橋文治氏から、それとは別の「蒙哥聖旨裏碑」が浮山県博物館にあり、その碑は「戊午年三月」であるという貴重なご指摘を、研究会の席上でいただいた。たしかに資料『龍角山与慶唐觀』にその録文があり、また『慶唐觀』には拓影が印刷されているものがこれにあたるようである。そこには「三月」と明記されている。つまり我々が実見した「四月」蒙哥聖旨裏碑とは別にもう一つの碑が存在することがわかった。

2009年、「四月」碑は貫里村入口にある「老年小学」なるコミュニティーセンター内の碑廊に移設されている。センターの碑廊には、この他に清碑が10餘、明碑1、宋碑1などがある。

なお、さきほどの「三月」蒙哥聖旨裏碑については、『三晋石刻総目』臨汾卷に紹介されており、「碑版78×50×23cm、周囲に花紋を刻む。文字には大小あり、2cm程のものが一般的だが3cmもある。年月日の字は4cmで、年号の上部に7cm四方の篆文印章が刻まれている」（167頁〔217〕）とあり、「四月」碑よりやや厚手になっている。また「三月」碑が展示されているという浮山県博物館を訪れたが、2009年夏時点においては参観できなかった。

これら二つの聖旨碑の由来や録文については、高橋文治氏による研究が近刊される。

《天聖宮祈雨靈応記碑》

『三晋石刻総目』臨汾卷167頁〔219〕に、「青石質、円首、篆額あり。碑版151×62×28cm、元至治三年歳次癸亥(1323)。浮山県尉程鵬翼篆文、晋寧路浮山県主簿劉信書丹。楷書」とある。2005年、祠堂東側に横置き、下部数センチが土中に埋没していたが、2009年にはやや整備され、参道右側に立てられている。

《石雕琉璃角柱(左・右)》 大徳七年(1303)

『三晋石刻総目』臨汾卷 169 頁 [236/237] にある。現在も境内に存す。

《明～民国》

《明》	撰者			三晋	龍角山	慶唐觀	貫里村	天聖宮
重修天聖宮各村施資財木植姓名		隆慶 2	1568				存	
天聖宮碑記		萬曆 14	1586	○				

《清》	撰者			三晋	龍角山	慶唐觀	貫里村	天聖宮
龍角山二峰神碑序	康玉川	康熙 1	1662		録文			
禁止結社碑		康熙 16	1677				存	
重修天聖宮碑記		康熙 38	1699	○				
善人碑		雍正 10	1732				存	
斷案水據碑		乾隆 48	1783				存	
重修碑		乾隆 60	1795				存	
重修天聖宮碑記	張炳南	嘉慶 16	1811		録文		存	
重修天聖宮碑記		道光 1	1821			写真	存	
重修二峰山碑		道光 13	1833				存	
創建玉皇塔碑記		道光 26	1846				存	
將軍殿臺殿東二簷碑		光緒 22	1896				存	

《民国》	撰者			三晋	龍角山	慶唐觀	貫里村	天聖宮
天聖宮募資添置神器碑記		民国 7	1918	○				存

貫里村の入り口に位置する老年小学にある碑廊には「重修天聖宮碑記」(道光元年)をはじめとする碑のほか、未整理の碑および碑片が数点保管されている。

おわりに

天聖宮とそれを取りまく自然の清浄な美しさは古くから賞賛の的となっている。たとえば、至正六年(1346)春二月六日、肅政廉訪使としてこの地を訪れた、高昌偁氏の俊秀、延祐五年の進士、偁玉立に「天聖宮に謁す」という詩がある。

玉騎朱旄降翠巒	玉騎と朱旄は翠(あお)き巒(やま)に降り
神光紫氣応函関	神光と紫氣は函関に応ず
真仙出沒時無有	真仙の出沒すること時に有る無く
客使憂勤自往還	客使は憂勤して自ら往還す
古殿烟横千歳栢	古殿の烟は横たわる千歳の栢
靈池雲繞萬重山	靈池の雲は繞る萬重の山
瓊枝珠蕊垂甘露	瓊枝と珠蕊は甘露を垂らし
願祝豊年瑞雪頒	願い祝るらくは豊年瑞雪の頒とならん

これは「謁天聖宮并序碑」として伝えられ、清代には顧嗣立(1669—1722)によって『元詩選』三集卷十におさめられることになる。また原文は『浮山県志』(同治、光緒)などにも見える。『三晋石刻総目』臨汾巻には、この碑も天聖宮遺址に現存しているとしているが、今回は確認できなかった。

古くから、多くの詩にその麗しさをうたわれた天聖宮も、いつのまにか人々から忘れ去られるようになった。

現在この宮の住持であり、道教教義の研究者としても活躍されている、莊道士によれば、天聖宮は度重なる戦禍を被り、敷地を囲んでいた牆壁もなくなり、伽藍は壊滅して、今はこの小さな祠堂が残るにすぎないという。そのお話の通り、小祠の西側には「中華民国七年(1918)」の記年がある碑石や、「重修聖宮右跡碑誌」と読める篆額片などが散在し、石柱などとともに叢に倒れたままである。古来、東張郷が南北交通の要衝であることに加え、貫里村一帯が高台になっていることもあり、たびたび戦禍を免れなかったのだろう。

現在ここ天聖宮遺址は、浮山県、貫里村の人々が莊道士らを中心に再建に尽力している。爽やかな風が吹く、「二峰夕照」という言葉にふさわしい風光明媚なところであり、一日も早い復興が期待される。道士の日常は厳しいとのことだが、数年前に還暦を迎えられ、いっそう若々しく、私たちに「氣」をおくってくださいました。

《参考文献》

姚錦玉主編『龍角山与慶唐觀』浮山県老促会、2003年3月

楊紅旗ら編『慶唐觀』浮山県慶唐觀編委会、2008年10月

村岡倫「モンゴル時代の右翼ウルスと山西地方」『碑刻等史料の総合的分析による
モンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎研究』、2002年

「モンゴル時代の山西平陽地区と諸王の權益 — 聖姑廟「阿識罕大王令旨
碑」より—」『13、14世紀東アジア史料通信』第10号、2009年3月

解希恭・張新知編『三晋石刻総目』臨汾巻、山西古籍出版社、2004年

金、闕名輯『龍角山記』、中国道觀志叢刊続編所収影印正統道藏本

(わたなべ ひさし 龍谷大学)